様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 ２３ 日現在

機関番号：３４４１５
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2013～2015
課題番号：２５８７０９２３

研究課題名（和文）遺児大学生へのグリーフケアグループ実施の意義-悲嘆と人格変化への効果の検討

研究課題名（英文）The significance of grief care groups for the surviving college students of parental loss - study of the effects of the grief and personality change

研究代表者
倉西　宏（Kuranishi, Hiroshi）

追手門学院大学・心理学部・講師

研究者番号：４０６２４２８４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：遺児大学生へのグリーフケアグループ(GCG)の意義を中心に、死別体験後の心的なプロセスを検討した。GCGや死別体験に焦点づけた個別面接によって悲嘆は軽減されることが見出された。また事例研究においては、グリーフケアは悲嘆にのみ効果があるものではなく、遺児の人格や生き方を変化させ、自身の在りようを新しく生み出していくことに寄与することがわかった。また、両親の離婚の後に、その離別した親との死別を経た遺児は、グリーフケアグループによって一過的に悲嘆の程度は上がるが、継続して死別体験に取り組むことによって死別体験が再構成化され、悲嘆も軽減していくプロセスが見出された。

研究成果の概要（英文）：In this study, we examined the significance of Grief Care Group to university students who have lost their parents, and their psychic process. It was found that grief is reduced by Grief Care Group and an individual interview in a numerical side.In the case studies, the Grief Care Group brought a character change in surviving children. In addition, it was examined the surviving children that lost their parents after their parents divorced. The degree of their grief transiently increased by Grief Care Group. However, after bereavement experience reconstructed, grief was reduced.

研究分野：臨床心理学

キーワード：グリーフケアグループ　死別体験　悲嘆　自死

１．研究開始当初の背景

（１）死別・悲嘆研究の動向

近親者の死はライフイベントにおけるストレス強度では最上位に位置し(Holmes,T.H. et al 1967)、うつ病等の精神疾患や症状を生む場合もある(Bowlby,J.1980)。しかし通常の死別体験と援助が必要とされる長期慢性化された病的な悲嘆や外傷的な死別をいかに区別するかの議論は未だ結論づけられていない。これらの中で病的な悲嘆はうつ病等とは異なる独自の障害として「複雑性悲嘆障害」(Horowitz,M.J. et al 1997)が提唱され、そのための基準や尺度も作成され始めた(Prigerson et al.1995、Shear.K et al.2006 等)。さらに DSM-5 草案においては死別関連適応障害の提案(DSM-5 work group. 2011)や死別反応が大鬱病性障害を診断する際の除外項目ではなくなる方向が検討されている(APA. 2012)。これらの流れもあり遺族や遺児への援助の必要性を評価するための土台が整い始め、援助活動にも繋がり始めている(認知行動療法による成果等 ex:Shear.K et al.2005)。

（２）グリーフケアの意義

複雑性悲嘆は心身の健康を脅かすだけでなく自殺の危険因子ともされており(Latham,A.E. et al 2004)専門的援助が必要になる。しかし複雑性悲嘆や精神疾患に至らずとも、死別体験を経ることで感情面においては鋭敏性を持つようになり(平島 1996)、さらに幼少期の死別体験での情動が未処理の場合、後の喪失体験の際にその情動が再燃し心理的不安定に至ることも指摘されている(岡田 2003)。ゆえに死別体験に取り組むことによって精神疾患の予防や精神的安定に繋がると考えられている。さらに死別体験に意味を見出すことで人生をより有意義に生きることができること(Neimeyer,R.A.2001)、死別体験が人間的成長(東村ら 2001)や人格発達を引き起こす(渡邉・岡本 2006)ことが述べられている。ただ、そのような成長や人格発達に至るには適切なケアがあること(Neimeyer,R.A.2001、渡邉・岡本 2005)が必要だと述べられている。つまりグリーフケアには、精神的安定だけでなく人格変化をもたらす等の幅広い意義が存在しているのだ。

【遺児への援助と研究について】遺児へのグリーフケアは諸外国では行われているが(ex:The Dougy Center for Grieving Children 1998)、国内では遺児支援団体「あしなが育英会」が行っている活動が見られる程度である。それに伴い諸外国では遺児研究は散見されるが(ex:Worden,J.W.1996)国内ではほとんど見られず、山本・岡本(2009)や「あしなが育英会」が行っているケアプログラムの検討(副田 2002)、遺児の作文集の分析等(高橋 2003 等)が見られる程度で、まとまった仕事が存在しない。それは遺児というテーマを扱う倫理的難しさや対象者を募る難しさ、遺児が援助の対象と見なされていないという問題点も存在しているためと考えられる。

（３）グループによる援助の有効性

遺族支援ではグループによる援助も個別援助と変わり無い効果を上げているが(Yalom,I.D. et al.1989)、日本では広がりを示していない。近年になってやっと成人遺族へのグループによる援助は増加傾向にあるのだが(川野 2005)、そこに遺児が参加することはほとんど無いという(石倉 2008)。グループの優れた点の 1 つはその費用対効果である。つまり効果は変わり無いのに少ない人数で多くの方々に利益を提供することができる。さらにグループ内で被援助者が援助者役を自然ととることによってエンパワメントされる「ヘルパーセラピー原則」もグループの特徴である。遺児においては遺児である自分と両親健在の他者との間に違いを感じて孤独感を抱くのだが(Schuurman,D.2009)、遺児は他の遺児との交流や語り合いによって、孤独感から解放されることが見出されている(倉西 2010)。ゆえに遺児へのグループによる援助では個別援助だけでは得られない体験を提供することができる。

２．研究の目的

未成年時に親と死別した大学生(以下、遺児大学生)への死別体験に焦点を当てたグループ体験(以下、グリーフケアグループ)の効果と意義を見出すことを目的とした。グリーフケアグループを実施し、悲嘆の効果測定を行うと共に、悲嘆だけではなく死別体験に取り組むことで人格がいかに変化し得るのかについても検討を行った。グリーフケアグループに参加しない遺児大学生を対照群として設定し、並行して調査を行うことで比較検討も行った。また、これらの中で遺児大学生へ

のグリーフケアグループの意義についての検討も行った。

３．研究の方法

（１）対象者の募集

インフォームドコンセントを徹底した上で、遺児支援団体「あしなが育英会」と「あしなが学生募金事務局」(遺児大学生で構成されたボランティア団体)、複数の関西圏の私立大学通じて関西の遺児大学生から研究協力者を募った。

（２）グリーフケアグループの形式と調査方法

①導入面接と心理検査によるアセスメント

導入面接では、家族、成育歴、死別体験、死別体験のこれまでの変化と現在の位置づけ、現在の心身の状態等についてインタビューを行った。さらに心理検査も実施し、病態水準が重いと判断される場合や心身の疾患を有し加療中の場合、慎重に検討を行った上で参加の可否を決定した。

②調査に用いる心理検査・尺度

心理検査・尺度はバウムテスト(以下、バウム)(Koch,K.1949)、風景構成法(以下、LMT)(中井 1971)、簡易版悲嘆質問紙(Brief Grief Questionnaire：以下、BGQ)(Shear.K et al 2006)、複雑性悲嘆質問票(Inventory of Complicated Grief：以下、ICG)(Prigerson et al.1995)を用いた。バウム、LMT は日本の心理検査の使用頻度の上位に位置するもので、病態水準の判断にも活用されており(岸本 2002)面接と合わせて病態水準の評価に用いる。さらに投影法の人格検査でもあるため、グループ実施後にも施行することで前後の人格変化や深層心理の変化の評価にも用いた。BGQ は全般的な悲嘆の程度を評価することができる尺度であり、ICG は長期遷延化された死別による悲嘆を測るための質問票である。面接と合わせてグループ実施前後に施行し悲嘆に関する効果測定に用いた。

③実施場所と実施時間・ペース

場所は京都文教大学の秋田巌教授の個人研究所「オフィスオータム」と京都文教大学、京都文教大学サテライトキャンパスで行われた。週１回・90 分を５週で１クールのものを 25 年 6～9 月と 26 年 2～3 月に行い、4 回 1 クールのものを 26 年 5～8 月に行った。

④グリーフケアグループの実施の詳細

グリーフケアは情動的サポート、道具的サポート、情報的サポート、治療的介入に分類できる(坂口 2005)。本研究では情動的サポートと治療的介入を中心に行った。ゆえにグループの標準的な形式だと言える自由に語り合う形式を基本とした。グループを進めていく際、参加者の流れに沿うことを原則としながら、随時介入も行った。第 2 クールでは描画と箱庭を用いたワークも導入し、多様なる表現形態を図った。

話さない・表現しないでいるということも保障する。目標の設定としては、自らの語りと他の遺児との共有を通じて死別体験を積極的に扱い、様々な気付きを経て死別体験を再構成していくことである。その結果、それぞれが自らの死別の物語を生み出しまとめていけることを目指した。

前後の面接とグループは録音、グループはビデオカメラによる録画も行った。

⑤心身不調者への対応

セッションごとに随時参加者の様子を確認し、心身の不調が見られる参加者にはセッション後に個別に面接を行い、参加の中断や退会等も視野に入れながらフォローを行った。

必要に応じて①筆者が勤務するカウンセリングルームにおいてフォローのカウンセリングを行う。②精神科医・秋田巌教授が勤務する渡辺クリニックへの紹介の準備も行っていたが、紹介に至るケースはなかった。

⑥事後面接と効果測定

1 クール実施ごとに 2 週間以内に面接と心理検査・尺度を実施する。事後面接では参加体験と死別体験の捉え方の変化、人格も含めた自身全体の変化等を伺う。そしてバウム・LMT・BGQ・ICG を再度実施し、その変化から効果測定を行った。

⑦対照群への調査

対照群にはグループ実施日程と並行して同じ期間を空けて面接と心理検査・尺度を実施し、比較として用いる。

2 クール以降の面接では前クール終了後からの変化について話してもらい、バウム・LMT・BGQ・ICG を実施する。事後面接はこれまで同様に行い、第 3 クール終了時は全体の振り返りを行う。対照群に対しても継続的に調査を行った。

グループの効果が実施から一定期間経過後に生じる可能性もある。ゆえにグループ終

了3か月後に追跡調査を行い、調査面接と心理検査・尺度を実施した。

４．研究成果

（1）悲嘆の変化

第1クール開始時点では、ICGが25点以上である協力者はGCG群で2名、対照群では4名いたが、第1クールのGCG実施後の調査時にはGCG群では全員がカットオフ値以下となり、対照群は3名が25点を下回り、1名のみとなった。1クールの前後の比較を行うために、独立変数をGCG参加の有無と調査面接、従属変数をICG得点とする混合計画の2要因の分散分析を行ったところ、調査面接要因における主効果が認められた（$F(1,15)=6.36$, $p<.05$）。対照群においてもICG得点の低下が見られたことから、触れてこなかった死別体験を１対１の関係で言葉にし、それを丁寧に受け止めてもらうことだけでも、軽度な複雑性悲嘆ならば軽減が可能であることを示唆させた。

（2）事例研究

①自死遺児の事例から

（ｉ）喪失対象との関係性の変化

GCGによって喪失対象との関係性はa.父の存在が物語に含みこまれていない垂直次元の関係性、b.自身の人生の物語に含みこまれた現実感のある生きた水平次元の関係性、c.傷の内在化による重なり合い生き続けるものとしての関係性の次元、へと変化が生じたことが見出された。Freud,S（1917）が喪失対象へのリビドーの脱備給（decathexis）を論じた背景には、喪失対象と自身の自我との病的な同一化の問題がある。ここで述べたc.の状態はその病的な同一化とは異なるものであり、一度対象化した上で再び主体的に傷と喪失対象と共に生きようとした「意志」が存在していることが考えられた。

本研究では喪失対象との関係性を考える際に「距離」という視点を持ち込むことで、「水平性」や「垂直性」等の空間的視点からの理解が可能になった。喪失対象への「感情」等の関係性に関する「内容」に焦点を当ててしまうと、ともすれば遺族にとっては極めて刺激が強いものとなる。しかし距離となると、関係の「構造」に注意を向けることになるため、枠組みから触れようとする意識を提供し、柔らかく喪失対象に触れ関係性を意識することができるのだと考えられる。

（ii）「死」と「生」の弁証法

自死における困難性の一つは死者に死を与え、いわゆる「あの世」に「送る」ことができないことであり、自死で亡くなっていった方に死を付与するということが大きな課題となってしまうのは、自死遺族が抱える罪責感と死者への囚われが関係していることも指摘されている（倉西2012）。囚われの次元におけるつながりの状態では、真なる別れの体験に至ることができない。GCGで「自分だけじゃない」と体験し、囚われから解放され自由になっていったことが重要であったように思われる。

また、梅村（2009）は死別体験後の悲嘆夢においては「つながり」と「へだたり」が同時的・逆説的に生じる弁証法的な動きが見られるとし、それらが弁証法的に止揚されていくことで喪の過程が進むと論じた。それらの動きと類似するのだが、本研究においても死別体験に取り組もうとすることで父とのつながりを得、父とのつながりを得ることによって父に死を与えることができたことが見出された。さらに父に死を付与することによって、父が内的に新しく生まれたのである。このように父という存在が内的に「生きる」ことと「死ぬ」ことが弁証法的に止揚されていくことでやっと自死遺族の喪の過程は進み始めることが可能になるのだと考えられる。

（iii）死別体験の意味の変容

GCGに参加することで、単なる傷だと思っていた死別体験が「ある種の個性になる」という理解に変化する語りが見られた。痛みある開いた傷を「塞ぐ」という次元から、開かれたその傷こそが「個」を生成し「私」を創造していくことになる、と傷の意味が変容することが見出された。大学時代に親との死別が再燃することは学生相談の事例などを中心に述べられているが（鳴澤1993、高橋2013）、それは青年期の自己形成への動きと連動していることが考えられる。そして青年期の自己形成には過去の傷の再構成が大きな役割を演じる可能性が示唆される。

（iv）死別体験による「私」の生成

GCGでは「死別体験自体を眺めること」と「体験した自分を眺めることができた」、「父に関しての喪の作業だったと同時に、喪失した自分の過去の喪の作業だった」と語っ

た。つまり、死別体験に取り組むということは死別体験を入口に「私」を再構成する過程であったと言うことができるのだろう。死別体験に取り組むには「私」とは切り離せず、「私」の変容無くして、死別体験の意味が変容していくことは無いとも言える。つまり、対象化された数値的な悲嘆の側面のみを見ていくだけでは、本質的な遺族支援や遺族理解は不可能であるとも考えられる。秋田（2014）は、Jung,C.G の個性化の過程を「自己創造」という言葉で表現しているが、まさに死別体験との取り組みはその「自己創造」の作業であったと言える。そしてその過程はその先も続くと A さんも理解している。

（ｖ）自死と対峙し続けていくこと

自死遺族の最も大きな困難性の一つは、自死と対峙し続けなければならないことであり、場合によっては終わらない苦悩を抱え続けることにもなり得る。本研究ではこの自死への囚われの存在意義については明らかにすることができなかった。自死遺族が自死による死別を抱えていくことが遺族にとってどのような苦悩を提供するのか、又は生きる上においてどのような意義が存在するのかについては今後の課題である。

②「曖昧な喪失」と理解される事例から

B さん、大学 2 年生、男性。小学校高学年時に両親の離婚によって父と離別した。そして高校 2 年時にその父と死別した。離別という曖昧な喪失後の死別には「3 度の別れ」と「2 度の出会い」が存在することが見出された。

（ｉ）1 度目の別れ：離婚による離別

1 度目は離婚時に生じる別れである。ここでは別れがあるものの、永遠の別れではなく、会おうと思えば会うことが可能であるという意味において、曖昧な喪失の段階であると言える。

（ii）1 度目の再会と 2 度目の別れ

それは父の死に向かい合う瞬間のことである。父との再会においては、父である側面と父親ではない存在であるかのような側面に出会う。それは時間を共にしていた部分の父と、自分の知らない時間を共にしていない間の父と出会ったとも言える。

常に不在の状態であったがどこかで生きてるという感覚を B さんは持っていたが、死によって「その曖昧な感じが鮮明」になったと語った。つまり、曖昧な喪失から、確かな喪失へと変化が起こった瞬間であったと言える。しかしこの段階の特徴は、すでに離別しているために、その後の生活自体は大きく変わらないということである。そして生活に影響は与えられない意味においては父との別れはまだ現実感を伴うものではなかったとも考えられる

（iii）3 度目の別れと 2 度目の再会

GCG に参加することで、B さんはお墓参りに行った。そこで父と対話を行い、「『いないけどいる』」という「曖昧」な状態から「今は『いない』」という状態に至ることになったという。ただ、「話したいことはいっぱいあって、本当に会いに行く感じで会いに行って、喋った」と語っており、父の死を現実化させることで、同時に内的に父と再会し、つながることができたのだと言える。

（iv）父との分離と囚われの解放

GCG 参加 4 か月後では「しこりが取れた」と感じ「今まで以上に普通に（死別体験を）話せる」ようになり「気になるものがなくなった」「後悔することもあったけど、今はそれも全部受け入れられている」などと語り、死別体験や父からの囚われから解放される状態に至ったことが見出された。

③面接のみの事例

20 歳、女性。母を 18 歳の時に病気で失くす。ICG 得点は当初カットオフ以上で一過的に上昇も示したが、その後低下を示し、最終的にはカットオフ値以下となった。悲嘆の変化に伴った「死別体験」との関係性の質的変化のプロセスを示す。

（ｉ）再体験

死別体験を語ることによって、死別体験の再体験をすることになり、一過的に ICG 得点は上昇したと考えられる。

（ii）対象化

継続して面接を行う中で言語化による対象化が行われ、ICG 得点が沈静化していったように思われる。

（iii）死別体験の喪失と罪悪感

ICG 得点が軽減していく動きと並行し、死別体験や母親のことを考えない時期が生まれ、そのことによって罪悪感も生じ始める。

（iv）囚われからの解放

面接を続けると、罪悪感は消失し、母親の存在が自身の中に溶け込むような感覚を抱

くようになり、死別体験への囚われが消えていくことが見出された。

④多重喪失の事例：死別体験の揺り戻し

父との死別後にきょうだいと自死を経た 3 事例について検討を行うことで、自死による死別はそれ以前の死別の意味を書き換える力が存在していることが言い出された。

一つの死別はそれ以前の死別を強く再燃させる力が存在している。それは特に「自死」であることも大きく関係している。自死は遺族に自責感や後悔の念を強く生み出す。時間を過去に留まらせる、または時間を過去に引き戻し、過去を生きさせるのだ。それは後悔や自責感を伴う自問自答を繰り返すことを通じて、死別体験や亡き人から離れずに、抱え続ける・つながり続けていると言える。今を生きることができず常に過去を生きさせようとする、そういった力が自死には存在している。それはつまり、自死はそれ以前の人生をもう一度掘り返し、これまでの在りかたや歩んできたことの意味を大きく書き換える力を持っているということなのである。

⑤グリーフケアグループの意義

（ｉ）器としての意義

GCG における語りはグループであるため、テーマや語ることができる量は限定されてしまう。しかし個別面接では、語りたいことを中心に語ることが可能である。ゆえに、語りの内容だけを見ると、個別面接の方が有意義であるかのようにも見えてくる。死別体験とは二人称の死であり極めて個別的な体験であると言える。個別的な体験であるためその体験に取り組むには個別的な作業が必要となる。ただ、そのためにはある種の死別体験からの囚われから解放されることが必要になる。グループにはその囚われからの解放を解き放つ力が存在しているように思われる。つまり、自己を顧みるにはそのための対称軸となり、自己を映す鏡として機能することで対象化され、個別的作業が可能になるのである。また、GCG は本人が取り組むことへの契機を与える。GCG がそのきっかけとなり、中継地点となるという視点である。

ゆえに、GCG を実施する際には、その間に個別面接を実施するべきだと提案したい。グループの中で語ることができることは少ない。しかしそこでの体験を増幅させて個別的に喪の過程は進展する。その内容を受け止める器が別に必要であるように思われる。

（ii）セッション内分析

グループでの参加メンバーによる発話及び応答の分析を行った。発話/応答の方向は、特定の参加者に向けられるもの、グループの場全体に向けられるものに形式上の分類することができるが、それらの意味的内容は単純な発話/応答間の方向軸(外的)に留まらず、沈黙や自身への問い返しといった各人の内的対話を導くもう一つの方向軸(内的)に働くことが示唆された。グループセッション内の発話/応答が、それぞれの固有な死別体験を共有することで他者性に対して開くと同時に、より深く個別性へと結びつけることが明らかになった。死別体験の他者性と個別性とのダイナミズム(力動関係)の発現・促進における安全性を保障することが、グループの臨床的・治療積意義であると言える。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　０件）

〔学会発表〕（計　１件）

①倉西宏・大日方薫・小林昌幸・藤井茉衣子、青年期を迎えた遺児へのグリーフケアグループの意義－死別体験への取り組みにおける心的変化の可能性－、第３３回心理臨床学会秋季大会、2014 年 8 月 24 日、パシフィコ横浜（神奈川県）

〔図書〕（計　１件）

①木原活信・引土絵未・倉西宏・尾角光美・大倉高志・金子絵里乃・山村りつ・市瀬晶子・李善恵（2015）：自殺をケアするということ：「弱さ」へのまなざしからみえるもの（新・MINERVA 福祉ライブラリー）　ミネルバ書房　共著　担当箇所：第Ⅱ部 第 3 章「多重喪失体験からみた「強さ」と「弱さ」」pp34-48

６．研究組織

(1)研究代表者

倉西宏（Kuranishi, Hiroshi）

追手門学院大学・心理学部・講師

研究者番号：40624284

（２）研究協力者

大日方薫（OBINATA, Kaoru）

小林昌幸（KOBAYASHI, Masayuki）

藤井茉衣子（FUJII, Maiko）